7/16 県民福井

平和守る覚悟はあるか

安保法案強行採決

「論説」 2015・7・16

安全保障関連法案が衆院の特別委員会で可決された。憲法学者の多くが違憲を指摘し、世論は反対が圧倒的だが、安倍政権は強引に押し切った。戦後七十年の夏は、平和を守る覚悟を私たちに問うている。

展示内容は昨年と同じなのに、切実さを感じるのはなぜなのか。

福井市の県国際交流会館で、パネル展「原爆と人間」が十八日まで開かれている。主催は新日本婦人の会福井支部。広島と長崎に原爆が投下された八月を前に、毎年、企画している。

長崎の爆心地付近で撮影された黒焦げになった子どもや母子の写真、被ばくの怖さを伝える絵「黒い雨」…。日本原水爆被害者団体協議会（被団協）から借りた二十九枚のパネルが、戦争と原爆の悲惨さを伝える。

今年は、安保法案をめぐる国会での審議、可決への動きと重なった。終戦の一九四五（昭和二十）年九月に生まれた福井支部常任委員の松浦茂子さん(六)は、法案成立に突き進む安倍政権に不安を抱く。「戦後七十年は、平和への歩みを確かにするための年のはず。逆方向に進んでいるようで」

会場には、被団協代表委員を務めた故藤平典さんが孫娘に宛てた手紙「17歳のあなたへ」の文章が展示されていた。

「あの悪魔の兵器がある限り、私は目を閉じられないのです。青春を大切にしてください。あなたの未来はあなたたち自身のものです。自ら考え、自ら歩んで、自らの手で〝平和と未来〟をつかみ取ってください。それが〝地獄〟から生き残った私の願いです」

国会周辺だけでなく、全国各地で法案反対の運動が高まっている。街頭演説やデモが続き、老若男女、主義主張を超えた連帯の輪が広がっている。

注目したいのは、若者の活動だ。長い間、政治への無関心ぶりを指摘されてきたが、抗議と怒りの声を上げ始めている。

学生グループ「SEALDs」（自由と民主主義のための学生緊急行動、シールズ）。今年五月に発足し、ツイッターなどでデモや集会への参加を呼び掛け、世代を問わず共感が広がっている。十日には国会前に一万五千人以上（主催者発表）が集まった。

「本当に止める」「勝手に決めるな！」。主張は簡潔明瞭だ。一人一人が考え、行動する。藤平さんが託した思いを、しっかり引き継ぐ。審議はまだ終わっていない。やるべきことはある。